

N0.63 2011年7月14日

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8

Tel & Fax 043-461-7004

八社のフクロウ

宮ノ台八社神社の工事が始まり、9月には完了とのことです。時折、夜にはフクロウが、ホーホーと泣いています。この八社神社にほんとうに神様は居られるのだろうか。幾度も前に佇み問いました。神様も近代化された佇まいをお好みなのでしょうか。そもそも整備された緑地公園のような必要があるのだろうか。削られた地膚がいたいたい。内心「あーあー、こんなにしてしまって」「木々の整備だけでよかったのでは？」と思わずにはいられません。近隣住民として12台分の駐車場を造ることに遺憾の意を伝えました。日本人として神様を祭る心は同じと思い、良心的な配慮をお願いできたらと思いました。

先日、テレビの人気ドラマ「仁」の終りに、江戸の古い日本の写真が映し出されました。「なんと日本の美しいことよ」多くの大切なものを失った気がします。文明や進化は、思い上がった人間をつくったのか、現在の豊かさを本物とは思えません。だって、40年以上も8時間労働の実態は変わっていないのですから。朝起きて、ご飯を食べて、仕事に行く。帰ると風呂、食事、寝る。忙しい毎日です。親として子供たちの生活が気になります。

折から、東日本大震災が起き、世界中を震撼させました。こと福島原発の事故は今も私たちを不安にさせます。終戦時、広島に原発が落とされたことの意味が思い知らされます。日本は、また、道を誤ってしまった。日本は原発を使ってはいけない国であったはず。世界から原発を失くす道を選ばなくてはいけなかったのではないのでしょうか。物造り日本を目指しながら、自然エネルギーへの取り組み、技術の遅れ、私たちは多くのことに無知であることを恥じねばなりません。いったい人間は、何を求めてどこまで行こうとしているのでしょうか。震災に遭われた人々、沖縄の基地問題、などなど、どこまで他人の痛みを歩み寄って物事を考えられるのか、今、人々に問われているのではないのでしょうか。

(村上まいこ)

佐倉市の放射能対策、検討委員会は何をやっているの？

～「ホットスポット」と呼ばれても～

次の地図は、福島第1原発から漏れた放射能の広がりを示したもので、6月18日、群馬大学の早川由紀夫教授から発信されている。国と自治体が7000か所あまりで測定・公表した数値をもとに作成したものだ。早川先生はもともと火山学専攻で、噴火時の降灰分布などを手掛けている研究者である。この地図によれば、佐倉市は同心円の200キロ圏内を少しはみ出したところに位置するが、0.25マイクロシーベルト/時間(μSv/hと略す)圏内に入っている。

0.25という数値は、当然、佐倉市が5月と6月に市内の教育施設や公園で測定した数値とほぼ一致する(ホームページ上は、5月30日、6月17日発表)。以下、佐倉市測定による宮ノ台近辺と最低・最高値を示した場所を一覧とした。私たちは、毎日、新聞などで発表される、千葉県市原市の数値0.04前後の数値を見て安心し、東葛方面が「ホットスポット」として報道されるのを見ながら、肝心の身辺の実態をキャッチしていなかった。

佐倉市測定の空間放射線量(単位マイクロシーベルト/時間)

測定日	施設名・調査場所	空間線量(地上50cm)	備考
5月25日	青菅小学校グラウンド	0.27 μSv/h	
5月25日	井野小学校グラウンド	0.26 μSv/h	
5月25日	山王小学校グラウンド	0.28 μSv/h	
5月25日	和田幼稚園庭・砂場	0.06 μSv/h	
5月25日	志津小学校グラウンド	0.23 μSv/h	
6月14日	志津小学校グラウンド	0.29 μSv/h	0.27 μSv/h 地上1m
5月27日	佐倉小学校グラウンド	0.10 μSv/h	
6月14日	佐倉小学校グラウンド	0.06 μSv/h	0.05 μSv/h 地上1m
6月14日	宮ノ杜公園芝生	0.31 μSv/h	0.24 μSv/h 地上1m
6月16日	上座公園西側園路	0.31 μSv/h	0.27 μSv/ 地上1m 0.47 μSv/h 地上6cm

佐倉市はこれらの数値に対して、文部科学省が出した福島県内の学校に対して「暫定的」に決めた年間1~20ミリシーベルトという数値をもって、すなわち、上限を時間あたりに換算した3.8μSv/hより低いのでと安全だとコメントしている。

佐倉市とさして変わらない「ホットスポット」的な数値を出している自治体の多くが、児童の保護者らの要請により、定期的な、多数の場所でのモニタリングを開始した。さらに、川口市、野田市、東京足立区などは独自の「安全基準」を打ち出して、その対策に乗り出している。

発表月日	自治体	規制基準	対策
2011年 6月20日	川口市	0.31 μSv/h 以下 年間1.64 ミリシーベルト (mSv)	屋外活動1日3時間以内。10か所、週1測定
6月25日	野田市	0.19 μSv/h 以下 年間1 mSv	0.3Sv/h 以上は立入禁止
7月7日	足立区	0.25 以下	土壌取替え、砂場使用禁止

これら先進的な自治体の基準になっているのは、国際放射線防護委員会（ICRP）2007年勧告の「一般公衆の年間被ばく許容量1ミリシーベルト」である。ところが、5月27日、文科省が福島の学校向けの基準数値「年間1ミリシーベルト」（ $0.19\mu\text{Sv/h}$ ）を出したと思ったら、6月24日には、数値は、あくまでも「目標数値」でそれを「越えてはならないという意味ではない」という通知を出している。

そして佐倉市は、いまだに「国の統一基準が出ていない」から福島県内学校あての数値をタテに動こうとしない。6月3日には放射能対策検討委員会を立ち上げているが、その動静は一切知らされず、いまだに担当部課の「連絡調整」をやっている。その委員長が「横並び」が信条の鎌田副市長なのだ。のらりくらり、放射線量の数値が低減するのをじっと待っているのだろうか。その間、子供たちの被ばくは進んでいる。それでも、教育委員会が、重い腰を上げて、前回測定しなかった教育施設での測定を7月12・13・14日に実施すると言っていた。ただちに、数値の公表と対策を打ち出してほしい。測定場所と頻度を増やし、市民に公開するのが先決である。

<http://www.asyura.us/bigdata/bigup1/source/151.jpg> ↓



☆編集後記☆「八社のフクロウ」の村上さん、初めてご寄稿いただきました。ありがとうございます。前号の東日本大震災特集には、多くの反響があり、心強く思いました。しっかりした取材・調査の上で、お伝えしておりますが、ご意見、ご感想も大歓迎です。

菅沼正子の映画招待席 35

一枚のハガキ

—絶対、戦争をしてはいけない—

日本人だけではなく、世界中の人々に見てほしい。戦争の恐ろしさは、戦場だけではない、銃後の人々の人生をも狂わせてしまうのだ。反戦を生涯のテーマとしてきた 99 歳の現役監督・新藤兼人が「映画人生最後の作品」と公言して 98 歳でメガホンをとった、驚くほどにパワフルな映画。

開巻そうそうからドツとばかりに涙があふれる。太平洋戦争末期の日本はもう負け戦で、戦場に送られる兵士は死にいくようなもの。明日からそれぞれの戦地に赴く 100 人の兵士。その壮行会を盛り上げるために、上官の命令で<君恋し>を歌う森川定造（六平直政）の純粋な顔。死を覚悟した人間は、こんなにも純粋になれるものなのか。その純粋さが涙を誘うのだ。

案の定、定造はあっけなく戦死、妻の友子（大竹しのぶ）は定造の弟と結婚させられるが、その弟も白木の箱で帰ってくる。息子 2 人に戦死された義父（柄本明）はショックのあまり心臓麻痺で急死、義母（倍賞美津子）は人生を悲観して自殺する。ひとり残された友子は気丈にもこの地にとどまって、定造の分まで生きようと決意する。

終戦になって、漁師の松山（豊川悦司）は帰還してくるが、自宅はもぬけのから。妻と自分の父親が不倫していて、夜逃げしてしまったのだ。喪失感がぬぐえない松山は、新天地ブラジルをめざすことにして荷物を整理していると、定造に託された一枚のハガキがでてくる。「今日はお祭りですが、あなたがいらっしゃらないので何の風情もありません。友子」—このハガキを友子に届けてほしいという依頼だったのだ。

約束を果たすため友子を訪ねた松山。古ぼけた家の暗い部屋。いろりをはさんで向かい合う 2 人。静かな会話のなかで、戦争の愚かさを痛烈に批判する新藤監督の人生に対する姿勢が見える。「なぜあなたは生きて帰れたの？」と友子。兵士 100 人のうち 6 人が帰還しただけ。その生死を分けたのは、上官が彼らの任務先を決めるためにひいたクジだった、と説明する松山。こんなシンプルなシーンで私が心を激しく揺さぶられたのは、信念を曲げない人間の尊厳をうたいあげた「白バラの祈り」（05 年）以来だ。人間のいのちがクジで決められていいのか。運がよかったとか悪かったで人生が左右されるほど、人間のいのちは軽いものなのか。スクリーンの奥から新藤監督の叫びが聞こえてくるようだ。

松山のキャラクターは戦争で生き延びた監督の体験を投影しているという。「戦死した 94 人の魂がずっと私につきまとっていて、これをテーマにして生きてきました」と監督。私の父も太平洋戦争で死んだ。教職にあった父は赤紙一枚で召集され、開戦間もない 1941 年 12 月 25 日死亡。勝ち戦の勢いがあるときだったので、遺骨とともに、サーベル、軍服、軍靴、手帳、日記など遺品はすべて戻ってきて、大尉だったので名誉の戦死とか称えられ、村をあげての葬式だったという。だが、そんな名誉がなんになるのか。父は生まれたばかりの私の顔も見ないで死んだ。親子顔知らずのままだ。「正子」、これは父が戦場でつけてくれた名前、父とのつながりを持つ唯一の贈り物。夫に戦死された母は、戦争を憎み、その憎しみをバネにして 3 人の子どもを育て上げた。60 年の母の苦しみを思うと、いまや旅立ってしまった母に、感謝の気持ちでいっぱいである。

（8月6日（土）よりテアトロ新宿ほか全国ロードショー）